

僻地への郷愁

筒井 宏

諏訪邦夫の追記..... 11

毎年ひやりとした風が吹きだす季節になると、私は山形県の山奥で過した五年間の鉱山暮らしのことを思い出す。秋が深くなって、一面に出そろった薄の穂が銀色に波うち、周囲の山の頂が白くなるころは、僻地のわびしさが殊に身にしみたからであろう。今では遠くなってしまったあの山村の風物や鉱山の生活などを、思い出すままに書いてみたい。

「たまーがわーぐちー」

駅員の連呼する声が、ひと気のないホームをつきぬけて、いやにはっきり聞えた。私ともう一人の乗客をおろした列車が、蒸気機関車の鋭い汽笛を響かせてすぐ前のトンネルに消えると、あとには身にしみるような静寂が残った。前後にきりたった山が迫り、その間を水量豊かな川が貫流する峡谷のような所に、その小さな駅はあった。駅前には五、六戸の人家が雪の中にひっそりと散在しているだけで、その向うには発電所の貯水池らしい白く凍った水面が寒々とひろがっていた。人影ひとつ見えない荒涼とした風景を前にして、私は思わず「これはきびしい所だな」と独り呟いた。

国鉄玉川口駅——上野駅で切符を買うとき、運賃表を調べる窓口の駅員は、なかなかその駅を見つけることができなかった。奥羽本線米沢から分岐して出羽山系の山間部を縫い、荒川の急流に沿って日本海岸の羽越本線坂町までを結ぶ米坂線の一駅である。米坂線沿線の唯一の一町らしい町は、山形県の西南隅に位置する人口約一万の小国町で、この小国地方は全国有数の豪雪地帯として知られている。小国を出た列車がまもなくさしかかる、新潟県との県境の峡谷部に玉川口駅はある。私がこの駅に降り立ったのは、昭和三十五年三月のある夕刻であった。ここから荒川の支流、玉川の上流に向かってさらに二十軒、飯豊山の山懐ふかくわけ入った所にある小さな石膏鉱山に、私は鉱山長として赴任してきたのである。この日から私の僻地での生活が始まった。

私が勤務することになった羽前小国鉱山は、玉川沿いの谷あい一番奥にある小玉川という部落にあった。雪国の家らしい、がっしりした造りの農家が十数戸、谷川に面した傾斜地にかたまっていて、その前面の川沿いに若干の水田が開けている。かなり古くから人が住みついた土地らしく、部落の外れに苔むした墓や古い神社、それに無住の荒れた寺もあった。鉱山は川をはさんで部落の対岸にある。遠くに連なる雄大な飯豊連峰を背景に、選鉱場と小さな事務所の建物がポツンと立っているだけの、いかにもささやかな鉱山である。ここで四十名足らずの従業員が、セメントの原料になる石膏の採掘に従事している。鉱山から少し上流の川縁に泡の湯温泉というぬるい鉱泉がわいていて、ただ一軒「三好館」という鉱泉宿がある。単身赴任の私は、その一室に下宿することになった。宿屋といっても客はめったにない。溪流の岩魚、やまめをねらってくる釣師、薬などの行商人、それに鉱山への来客がたまに泊る位のもので、ふだんは部落の人たちが寄っては酒を飲んで骨休め

をする憩いの場になっている。この宿の囲炉裏ばたでの付き合いを通して私は部落の男衆や女衆とも親しくなり、この山村の生活についての種々なことを知るようになった。

小国町を中心とするこの地方一帯の山地は盤梯朝日国立公園に含まれ、山岳、峡谷の景勝美に恵まれているが、一面では「山形県のチベット」とよばれ、県内でもとくに辺鄙な地域である。そのなかでも小玉川部落は、小国町の中心部から最も遠く離れた小集落の一つである。車の通う期間でさえ外界との交流はごく限られているのだが、殊に四、五米の大雪に埋没する冬期間は、文字通り「陸の孤島」と化してしまう。そういう特殊な自然環境の内に生きてきたこの部落には、昔からの部落共同体的な生活様式が余り変ることなくうけつがれていた。

十数戸の家はその大半が舟山姓なのであるが、それぞれが祖先からうけついだ「重左衛門」「庄兵衛」「弥助」などの屋号でよばれている。縁組はほとんど部落内か、あるいは近隣部落の範囲内で行なわれてきたから、全部の家が親疎の差こそあれ血縁関係で結ばれている。「重左衛門のオッカアと太郎助のオッカアは姉妹で、あの衆の実家は弥富だけんど、弥吉の今のオットーは武衛門から養子になった人で……」というような具合で、このややこしい親戚関係を頭に入れるには大分時間がかかった。

部落はまた経済的にも強く結ばれた共同社会である。小玉川は耕地の少い山村であるにもかかわらず、その経済生活は意外に安定していた。ここでは過疎現象どころか、出稼ぎの話も聞いたことがなかった。その最大の原因は、周囲の深い山に産するぜんまい、なめこ、わらび等の良質、豊富な山菜が安定した収入をもたらすことにあった。殊に小玉川のぜんまいは全国屈指の良質なものだそうで、毎年大阪の間屋が前金をつんで予約をし、一括買付けていく。ぜんまい採りの時期は、だいたい五月後半の十日間位に限られている。その間の部落はまるで戦争のような忙しさだ。学校は「ぜんまい休み」になるし、鉱山でも十名近くいる地元の従業員は大半が欠勤する。何しろこの十日ばかりが、その年の現金収入の額を大きく左右する勝負所なのである。ぜんまいによる収益は、その年のぜんまいの生育情況、価格の相場によってかなりの高下があり、またそれぞれの家の労働力の多少によっても相当の格差が生まれるのだが、大雑把に言えば、当時の金で一戸当り百万円近くにもなるとのことであつた。周辺の山林の大部分は部落の共有で、その用益については昔からの細々した決まりがあるが、ぜんまいの採取には特に厳重な規約が定められている。ぜんまい採りは必ず団体行動で行なわれ、個人の勝手な行動は一切許されない。

早朝五時、朝霜のなかを採取部隊は一団となって部落を出発する。良質のぜんまいは、遠く離れた奥山の断崖絶壁のような場所に生えているから、採取は体力のある男衆の仕事である。奥山に着いてからの各人の採取場所についても、公平を期すための細かいルールがあるらしい。夕方、採取組の男衆が、それこそ背負える限りのぜんまいを背負って帰ってくると、今度は家で待機していた女衆や老人、子供たちの出番になる。山のようなぜんまいを手早く選別し、庭先にすえた大釜でゆで、むしろの上にひろげて干す作業が始まる。暗くなった庭先にかまどの火が赤々と燃え、家中が総出で立ち働いている光景は、和やかな中にも活気が満ちていて、見ていて気持のいいものであつた。

このように一見平和な部落社会にも、その内部には山村であるが故の難しい人間関係がかくされていた。それは古くから一戸をなしていた「旧戸」と、新しく分家をしたたり、女衆の縁故で移ってきたりした「新戸」との関係である。前に述べたように、耕地の乏しいこの部落の主たる生活基盤は周囲の山林にある。その山林は、昔のある時期に定住していた一定戸数の旧戸が株をもつ形での共有に属しており、新しい株主は原則として認めないことになっている。その理由は明らかであろう。いかに優秀な山菜を産するとはいえ、この暮らしは、所詮限られた「自然」に依存している。一定戸数であればこそ、安定した生活が可能なのであり、山林用益権をもつ株主の増加は、即ち旧戸の生活を脅かすことになりかねないからである。そういうわけで、何年たっても株主になれない新戸は、同じ部落内に住みながらぜんまい採りを許されず、その他の山林の用益、部落財産からあがる収益金（例えば鉱山が部落に支払う借地料、共有地の立木の売却代金など）の分配等についても著しい差別扱いをうけなければならない。他に生活手段のないかれらは、私たちの鉱山か、あるいは隣り部落にある発電所に勤めることによって生計を立てている。当然、旧戸と新戸の間には一目でわかる生活程度の差があり、何かにつけて新戸は軽く扱われる。戸数わずか十数戸の小さな共同社会であるだけに、またお互い血縁につながる人たちであるだけに、この差別は新戸の人たちにとって耐え難いものであるに違いない。しかし外部の人間である私に対し、平素かれらはそういう不満の気配も見せない。ただ、たまたま泥酔したような折にもらす抑えきれない憤懣を聞かされる時、私は慰める言葉に窮したのを憶えている。

次に鉱山の生活について書いてみたい。鉱山といえは、誰しも危険で殺伐な世界を連想されるであろう。真っ暗な坑道、落盤やガス爆発による事故、荒くれ男 — そういったところが鉱山にまつわるイメージではないかと思う。ところが実際に鉱山で暮らしてみると、そこにはそういうイメージとはかなり違った面もある。尤も一口に鉱山といっても、諸設備の完備した近代的な大鉱山から、江戸時代と余り変らない原始的な採掘をやっている小鉱山まで種々あって、そこでの生活を一概に言うことはできない。私の話は、私が五年間生活した小国鉱山という、従業員四十名足らずの零細鉱山に限っての経験である。

鉱山の現場管理者として、最も気を遣うのはやはり事故である。地下数十米の所でダイナマイトを仕掛け、鉱石を採掘するのが仕事だから、絶対に危険がないというわけにはいかない。坑夫も慣れてしまって、わざと危険なことをして得意がる馬鹿者もいる。あちこちの鉱山を渡り歩いてきた古株の坑夫の中には「俺はあそこの鉱山で二人殺した」（自分が担当している持場の事故で、部下が二名死んだという意味）などと自慢気に言う者もいる。事故などは屁でもない、という風をするのが、古参坑夫の気取りなのである。だから新米の所長たる私は、毎日坑内の見廻りを怠るわけにはいかなかった。幸い小国鉱山は、開発が始まってから三年ばかりの新しい鉱山で、地盤全体がまだしっかりしていたことと、石膏が割に堅い石であるために、落盤の危険は比較的少なかった。地下四十五米まで掘り下げた堅坑を、垂直の梯子をつたって降りていくのは、余り気持のいいものではなかったが、坑道においてしまえば堅牢なビルの中にいるようなもので、殆ど不安を感じることはなか

った。炭坑でよく大事故の原因となるガスの噴出も、ここではごく微量であったから、その点も余り心配はなかった。兎も角、私が鉱山長として勤務していた間に、事故らしい事故が一件もなかったことは、本当に幸運であったと思っている。

そういうわけで、地下の坑内というのは、慣れてしまえばそれ程危険な所でもなければ、居心地の悪い所でもない。殊に労働の場としての坑内の大きな利点は、気温がだいたい十五度から二十度前後と一定しているため、夏は涼しく冬は暖かいことである。地上の気温が三十度をこす炎暑の日でも、一歩堅坑に入ると快い涼風が吹き上げてきて、坑内はさながら冷房完備のビルと変らぬ快適さである。冬は冬で、地上には眼もあけられないような猛烈な吹雪が吹き荒れていても、坑内ではシャツ一枚になった坑夫が、物音一つしない切羽の前でのんびりスコップを使っている。全身雪にまみれて地上からとび込んできた者には、それはまるで嘘のような光景である。そういう意味では、坑内はまさに別天地である。

坑夫は地上のことを「オカ」とよぶ。かれらは「坑内ほどいい所はない。俺たちはオカでは働く気がしない」と言う。たしかに坑夫稼業を長くやった者は、余程のことがない限り他の仕事に移りたがらない。いま働いている鉱山が閉山になれば、仲間のつてを頼って別の鉱山へ移っていくのが普通である。そもそも鉱山業というのは、限りある鉱物資源を掘るのだから、頑張って掘れば掘るほど自分の寿命を縮めていくという悲しい宿命を背負っている。ことに小資本の零細鉱山の場合には、余程の好運に恵まれない限り、遅かれ早かれ必ず閉山という運命が待っている。その事を百も承知で、かれらは鉱山から鉱山へと流れて行くのである。その理由は一体何であろうか。

熟練した技術を生かす有利さ、他への転職の困難さ、そういう一般的な理由は、かれらの場合にも勿論大きいに違いない。また、鉱山労働が他の肉体労働に比し、比較的高賃金であることも一つの理由であろう。しかしそれらの事情以外に、かれらを鉱山から離れ難くさせている理由として、鉱山労働者特有の性格、および鉱山社会の特殊性ということがあるように思われる。鉱山の男たちといえば「荒くれ男」というイメージを抱きがちであるが、実際には、無口で、引っこみ思案で、酒の勢をかりなければ何も言えないというタイプの人が意外に多い。世の中の激しい生存競争や面倒な人間関係に対処して、うまく生きて行くことの苦手な人たちである。そういう性格の人にとって、鉱山という場所は比較的生き易い世界なのである。その点について少しふれてみたいと思う。

鉱山の一日は、朝の「番割」で始まる。番割というのは、その日の坑内での持場を各人に割り当てることである。番割をうけた坑夫たちは、堅坑から入坑し、それぞれの持場へ散っていく。地底での、石を相手の一日の労働が始まる。坑内夫は、さく岩夫、運搬夫、支柱夫に大別され、それぞれ大体きまっただけの量の仕事を、自分のペースでこなせばいい。仕事の上では、殆ど口をきく必要もなければ、うるさい監督をうけることもない。ここで坑内作業の一場面を紹介してみよう。坑内を見廻りに行くと、真っ暗な坑道のはるか向うに微かな明かりが見える。近づいていくと、切羽の前で坑夫がひとり、度をおろし黙然と

煙草をふかしている。「御苦労さんです」と一言あいさつをし、カンテラの光で照らされた切羽の表面をじっと眺めている。かれは、坑内夫の花形とされるさく岩夫である。かれの仕事は、さく岩機を使って切羽面に十本ぐらいの穴をうがち、それにダイナマイトを充填して鉱石を爆砕することである。かれは鉱石の硬さや層の走り具合をよく見極め、それによって穴をうがう位置、その深さ、角度などを考える。火薬の爆破力をもっとも有効に活用することによって、いかに少量の火薬で最大量の鉱石をおこすかが、さく岩夫の腕の見せどころなのである。かれはやがて腰をあげ、ゆっくりと仕事にかかる。外界から隔離された暗黒の坑道に、かれが操作するさく岩機のはげしい断続音だけが反響する。孤独といえば、これほど孤独な仕事も少ないと思う。しかし、人間は何事にも慣れるものようである。地底の孤独な労働に慣れた人にとっては、この暗黒の職場が他のどこよりも自身で気楽な世界なのであろう。

生活の場としての鉱山は、多少とも家族的な共同社会という性格をそなえている。従業員の大多数は、仕事場に隣接する社宅に住み、細君たちも鉱山の選鉱夫として働く共稼ぎが多い。食料、燃料などの生活物資は、会社がまとめて購入し、必要に応じて従業員に配給するのが普通である。ことに小国鉱山の場合は、近くに商店がなく、冬は交通が杜絶（途絶？）してしまうから、その間のすべての生活物資は会社が責任をもって供給しなければならない。秋口になると、会社は米、味噌、野菜、酒、燈油からインスタント・ラーメン、煙草、菓子、ちり紙にいたるまで、全従業員の越冬用物資を確保する。冬の間、全く魚を食わないではいられないから、会社が特別に手配して、いかや塩さばなどの魚類を町から運ばせることがあるが、その荷が着いた日の夜は、社宅全部の世帯が同じいかならいかを食うことになる。従業員はすべて必要な品物を、伝票を書いて事務所でうけとり、その支払いは毎月の給料差引になる。ここでは現金をもつ必要が一切ない。必要がないというより、金を使おうにも使う場所がない。商店、飲食店がなく、映画、競輪、パチンコなどは、すべて遠い国の話である。私が赴任した当時は、高い山に囲まれた地形のために、テレビも写らなかった。（裏山の頂上に中継塔をたて、何とか受像できるようになったのは三年ぐらい後であった）結局、唯一の楽しみは酒ということになるので、なかには飲みすぎて仕事を休んだり、給料が赤字になる者もでてくる。こういう場所では、そんな連中も放っておくわけにはいかないから、何とか暮らせるように会社や同僚が面倒をみることになる。鉱山が営利事業である以上、ここにも労資の対立は勿論あるのだが、何といても四十人ばかりの人間が「陸の孤島」に寄り合って暮らしている小さな孤立社会である。ここではなお古風な義理、人情が、現実的な意味をもっている。どちらかというと言極的な性格の人が多い坑夫たちが、極端な生活上の不便を忍んでも鉱山を離れたがらない一つの理由は、鉱山特有の共同社会的な連帯性にあるのではないかと思う。

内部には共同社会的な人間関係をのこす僻地の鉱山も、事業としては、せち辛い資本主義社会の片隅に生きる一零細企業である。現場責任者という私の立場からすれば、決して気楽な稼業どころではなかった。鉱山はたいがい交通不便な山の中にあるものではあるが、

それにしても小国鉱山の立地条件は余りに悪すぎた。当時、東北地方の山間部にはまだ大小数多くの鉱山が稼働していたが、これほど条件の悪い鉱山は、他に余り例がなかったと思う。例年、だいたい十二月中旬にトラックの運行が止まり、それから交通が再開する四月末までの約五カ月間、一塊の石も搬出することができないのである。従って残る七カ月間に、年間の経営を維持するに足るだけの量の石膏を玉川口駅まで輸送しなければならない。冬期五カ月間の交通杜絶は、小国鉱山のもつ宿命的な弱点であり、この零細鉱山が企業として存立しうるか否かの殆どぎりぎりの条件であった。ところが、悪条件はそれだけではなかった。トラックの運行再開後の、玉川口駅までの石膏運搬についても、いくつかの困難があった。その一つは、玉川口駅まで二十軒のトラック輸送に、片道一時間半を要するという都会地では想像もできない道路の悪さであった。そのため、トラック一台の一日当りの輸送能力はきわめて限定され、そのことは輸送コストの面に大きく響いた。もう一つは、重量物輸送にかなりの危険を伴ういくつかの橋が、途中にあることであった。橋の危険については、忘れ難い思い出がある。

赴任した当初、私が何よりも驚いたのは、石膏を満載したトラックが、深い渓谷にかかる吊り橋を渡っていく光景であった。それは玉川の本流にかかる長さ百米に近い大きな吊り橋である。太い角材をボルトでつなぎ合わせた橋体を、四本の鋼鉄のワイヤーで吊るした橋で、その両端には「重量制限三屯」と書いた木札が打ちつけてあった。しかし輸送用トラックの自重が二屯以上あるのだから、三屯の重量制限を守っていても、鉱山としては仕事にならない。事故は恐いが、さればとって安全第一の立場に立てば、その吊り橋一つのために小国鉱山の操業は不可能になる。人命の危険は覚悟の上で、五屯の石膏を積んだ、計七屯を超える重量のトラックを渡らせる以外に道はなかった。私も駅への往復にはトラックに同乗するのだが、その吊り橋にさしかかるときには、流石にいい気持はしなかった。トラックの前輪が橋にかかると同時に車体がガクンと下がり、ミシミシという無気味な木のきしむ音とともに、前方の橋板が車の前面にもり上ってくる。緊張の一瞬である。「ここでお前と心なか」などと冗談めかして運転手と話してはいるものの、眼下はるかに岩をかむ激流を見ながら最徐行で橋を渡りきるまでの数分間は、思わず手足に力がいいる。ところが、毎日この吊り橋を往復している運転手や、鉱山のトラックを便利な足として便乗する地元の人たちは、一向に平気である。元来が荒い自然の中に生まれ育った、根っから剛健な連中である。春のぜんまい採りにせよ、冬の熊捕りにせよ、安全第一でできる仕事ではない。われわれ都会育ちの人間のように危険に対し過敏な神経をもっては、この僻地で生活することはできない。ミシミシときしむ吊り橋の上で、呑気そうに世間話に興じる男の顔をみながら、本当の「質実剛健」というのは、そんな言葉を知らないこういう人たちの生活を言うのだろうと思った。それは兎も角として、この吊り橋に企業の運命を握られている鉱山としては、一日も早くこれを安全な永久橋にかけかえることが何よりの念願であった。勿論これは一零細企業の手には負える仕事ではなく、行政の力による以外にはなかった。何回となく県や政治家への陳情にも出かけたが、何しろこの橋より奥に住む人口は二百に足らず、鉱山のトラック以外の車輛交通は皆無に近いとあっては、行政当局も

容易には手をつけてくれない。ようやく念願かなって、安全なコンクリートの橋が完成したのは、私が行ってから三年後のことであった。その間、あの吊り橋がよくぞあれだけの重量に耐えてくれたものだと、今ふり返ってみてもゾッとすることがある。

僻地暮らしのもっとも鮮烈な印象は、やはり冬である。都会生活しか知らなかった私にとって、冬の小玉川はまさに想像を絶する世界であった。話には聞いていたが、屋根まで埋める雪というものを私は初めて見た。屋根の高さまで雪に埋没した家への出入には、特別な工夫がなされている。降雪前に、戸口から除雪し易い場所まで細木や柴でトンネルをつくっておき、積雪後はそれを通して出入するのである。昼でも真っ暗な家のなかで、人びとは何をして暮らしているのであろうか。冬籠りの部落は、いつもしんと静まりかえっていた。恐らく、何百年も昔から殆ど変ることのない冬の山村の姿が、そこにあった。

鉱山では、トラックの運行が止まった後も、坑内の作業が変ることなく続けられる。春からの集中的な出鉱にそなえて、冬期間にできるだけ各方面に探鉱坑道を延ばし、充分な量の石膏をつかんでおかなければならない。前に述べたように、坑内には冬も夏もないのだが。しかし、一日の仕事が終って一歩坑外へ出ると、そこは烈しい風と雪の吹きすさぶ世界である。男はアノラック、女は角巻を頭からかぶり、背中を丸くした従業員が、雪の上を一行につながって社宅へ帰って行く。何もかもが冷えきった家に帰り、社宅の共同風呂で身体を暖め、粗末な夕飯がすめば、後は冷たい蒲団をかぶって眠るだけの生活である。一片の色彩もない陰鬱で単調な毎日がつづく。それだけに、ごくまれに晴れる日がある上、何ともいえない幸せな気分になる。ぬけるような青空の下にひろがる雄大な白銀の世界は、神秘的な美しさに輝き、昨日までの暗鬱な空がまるで嘘のように思われる。暗い家のなかに閉じ、こめられていた部落の人たちも、みな戸外に出てきて、雪の表面に眩しく反射する陽光を一杯に浴びながら、洗濯物を干したり、屋根の雪おろしに精を出す。しかし、そういう幸せな日も二日とは続かない。山の頂にうっすらと雪がかかってくると思えば、忽ち雪がチラチラ落ちてくる。やがて風がでてきて、雪はしだいに密度をまし、またいつものような吹雪にかわっていくのである。

この山村で冬を過してはじめて私は、東京で暮らしては全く意識することのなかった都会の魅力というものを、身にしみて感じさせられた。仕事のひまなとき、雪とつららに閉じこめられた鉱山事務所で過す一日はながい。そんな時、私の脳裏にうかぶ東京は、ある時は、魚屋、果物屋、洋菓子店などの明るい店先が並ぶ商店街の雑踏であり、ある時は、颯爽と街を行く華やかなファッションの若い女性の姿であり、またある時は、寿司屋、鰻屋、そば屋などが軒をつらね、何でも食いたいものを食うことのできる盛り場の光景であった。宿のカチャチャンがつくってくれる貧しい弁当をつつきながら、こんど東京へ帰ったらまず何を食おうか、などと考えたものである。

国鉄ローカル線の赤字経営がよく問題にされるが、こういう豪雪地帯をはしる鉄道は、その土地の人にとっては、本当にかけがえのない交通機関である。冬期間の小国地方は、米

坂線の二本のレールによって辛うじて外界につながっている。どんな大雪のときにも駅まで出さずれば、あとは新潟でも東京でも、行きたい所まで汽車が運んでくれる。(尤も大雪のため、米坂線が不通になることも、一冬に一度か二度はあった) そういう意味で、僻地における駅は、外界へ通ずる唯一つの接点である。旅行者の眼には、何故こんな所に駅があるのだろう、と思われるような山間の小さな駅も、その周辺の集落に住む人びとには、死活にかかわる貴重な存在なのである。駅員わずか二名の(鉱山の閉鎖後、無人駅になった) 貧寒たる玉川口駅も、ここを石膏積み込みの仕事場としていた私にとっては、いつまでも忘れられない懐しい駅である。

鉄道から離れた山間部の住民にとって、問題は、駅へ出るまでの困難である。車の交通絶後は、駅までは何としても自分の足で辿りつかない限り、文明世界へ出ることはできない。小玉川から玉川口駅まで二十軒。その間の歩行に要する時間は、天候と雪の状態によって一定しないが、二月以降の雪の表面が固まった時期で約六時間、それ以前ならば八時間は覚悟しなければならない。ある年の年末、仕事納めの二日前から細かい雪がしんしんと降りつづき、一挙に五米に近い大雪になったことがあった。仕事が終われば、正月を前にして「帰心矢の如し」という心境になる。無謀とは思ったが、胸まで没する新雪のなかを、従業員二名とともに小玉川を出発した。こういう雪のときには、スキーは勿論のこと、かんじきも余り役にはたたない。深くもぐった足を片足づつ引きぬきながら、一步一步前進するより仕方がない。一人でも歩いた跡があればぐっと楽なのだが、だれもが人の後を行こうとして最初に出かける人がいない。私たち三人は、交替で先頭をつとめながら進んだが、頭だけ出している電柱と電柱の間隔をラッセルするだけで、もう息がきれて動けなくなる。ときどき雪の中に座りこんで、呼吸を整えてはまた前進する。こんな時に天候が荒れてこようものなら、雪の中の遭難ということにもなりかねない。やっとの思いで辿りついた農家で振舞ってくれた飯と味噌汁の旨かったこと。こういう時には、どこの家でも喜んで食事を出したり、衣類を乾かしたりしてもてなすのが、僻地に住む人たちの仁義である。八軒ぐらい来た時、やはり正月休みで家に帰る隣り部落の分教場の先生が三人、追いついて来た。私たちが行ったのを見ていて、その後から出かけてきたのだと言う。若いくせにずい奴だと思ったが、六人になれば前進はうんと楽になる。結局、十一時間かかって夜の八時頃ようやく玉川口駅に着き、何とか終列車に乗ることができた。その間の所要時間という面では、この二十軒は、東京—九州間よりも遠く、その距離を自分の足で踏破するだけの体力を必要とするという意味では、海の向うの国より遠いともいえよう。玉川口駅で乗客の殆どいない終列車に乗りこみ、凍れきった身体をその固い座席に託したとき、私は腹の底からわき上ってくる解放感を満喫したものである。

冬の小玉川の思い出は、書き出してみると、種々なことが次から次と浮んでくる。今はそれらをじっくり書くだけの余裕はないが、一つだけ、忘れることのできない思い出を書いておきたい。ある朝、十数人の男たちが、病人を寝かせた大きな櫓をかこみ、部落の人たちに見送られながら、雪の中を出発していく場面に出会ったことがある。この地方では、医者は小国にしかない。風邪程度の軽い病気の場合には、この近隣の部落を担当する保

健婦さんが、部落にただ一本の電話で小国の医者 of 指示をうけながら、一応の処置をしてくれる。しかし本格的な診察、治療を必要とする場合には、病人を橋にのせて玉川口駅まで運び、さらに汽車で小国へつれていく以外に方法がない。玉川口までは、自分の足で歩いてさえ前にのべたような苦しい道中である。衰弱のひどい病人、痛みを訴える病人の運搬は、本人の苦痛は勿論のこと、運ぶ人たちの苦労も容易なものではない。まず橋の幅だけ雪を踏み固めて橋道をつくり、そのあとを押し手と引き手にわかれて橋を進めて行く。早朝に部落を出発した病人が、小国の病院のベッドに横たわれるのは、雪の状態のいい時でさえ午後六時すぎになる。病人にとっては、恐らく長い長い一日であろう。そして、二度と小玉川の土を踏むことができずに終る場合もある。

夏場でさえ手軽に診察をうけられない上に、冬期間の入院は、大勢の人の厄介にならなければならぬこともあって、(病人の運搬には、各戸から男手を無償で提供することが部落の定めになっている) 手遅れになる場合も少くない。その朝出発した病人は、私もよく知っている、まだ四十代の男の人だったが、不幸にして二度と彼の顔を見ること見できなかった。

「住めば都」とは、よく言ったものである。文明の恩恵をうけることの乏しいこの地の暮らしも、月日とともに不自由の意識はしだいに薄れ、外の世界のことはめったに意識に上らなくなる。一日か二日おくれて配達される新聞も、あまり読む気がしない。中央の政治情勢は勿論のこと、社会面をにぎわす様々な犯罪、公害問題、教育問題なども、すべてが遠い別世界の話である。一方、ここの生活に慣れるにしたがい、ここにも僻地ならではの楽しみがないわけではなかった。鉱山と部落共同のスキー大会、それと部落総出で行なう兎狩りは、冬期間の主要行事になっている。部落中がその日を心待ちにし、当日は、ふだんの鬱屈した気分をふっとばすように、誰もが童心にかえてカー杯奮闘する。そして、その後には必ず設けられる酒宴の席では、早速料理した兎の鍋を囲んで、男も女も、心ゆくまで飲み、笑い、歌って長い冬の夜を過すのである。ここでは、都会地のような男女をへだてる壁はない。山村の女性は、日々の生産労働において欠くことのできない働き手であり、外見的な女らしさを装う余裕はない。それに部落全体が親戚とっていいような大家族的な気安さもある。酒盛りの席では、女も負けずに飲み、歌い、きわどい冗談も言う。かれらが歌う歌は、「佐渡おけさ」「新庄節」「花笠音頭」「相川音頭」「相馬盆歌」などの東北民謡に限られる。どこか哀愁をおびたこれらの民謡は、恵まれない東北の自然に生きる農民の生活の歌である。雪に閉ざされたこの山村で聞くと、そのことが実感をもって感じられる。「雪の新潟吹雪に暮れて、佐渡はねたかや灯が見えぬ」。大都会と化した今の新潟には、もはやその情調は求むべくもないが、雪の小玉川で聞く「佐渡おけさ」には、じんと心に迫ってくるものがあった。都会的な歌謡曲全盛の現代においても、小玉川は昔と変らぬ民謡の世界なのである。

小玉川で五回の夏と五回の冬を過した後、私はふたたび平穏な都会の生活にもどった。あの長い長い雪道を吹雪に吹かれて歩くことは、恐らくもう二度とないであろう。私が退職

してから二年後には鉱山も閉山になり、従業員は四散していった。今では坑道は至る所で崩落し、選坑場の跡は無残な廃墟と化したと聞いている。部落の人たちの間では、小国鉱山十年の操業は、やがて一つの思い出話になっていくであろう。私にとっても、小玉川での鉱山生活は、めったに思い出すことのない遠い過去になろうとしている。しかし、消費文明華やかないまの日本の片隅に、小玉川のような僻村が存在し、生涯をあの山村で送る人たちがいるという事実は、やはり忘れることができない。こうやって書いていくと、部落のあれこれの人の顔が浮んでくる。

看護婦見習として就職する娘について上京した時、上野の駅前でくった寿司が旨かったと、飲む度に話していた吉五郎。発電所の夜勤の日には夜中の十二時に起き出し、烈しい吹雪の闇のなかを四軒先の発電所まで、事もなげに出勤していった宿の亭主鉄四郎。若いころ熊の一撃をくらったという肩の傷痕を見せては、熊狩りの手柄話を聞かせてくれた元気者の庄八。かれらは今年もまた、長い冬籠りの支度に忙しく立ち働いていることであろう。雪の訪れを目前にひかえ、冷たい雨にうたれる日の多い十一月の小玉川部落に思いをはせる時、私は胸が熱くなるような懐かしさを感じるのである。

(昭和五十三年十一月五日)

諏訪邦夫の追記：

この文章は、筒井宏氏が小さなパンフレットに書かれたものを私がみつけて、電子化したものです。内容をご覧のとおり山形県の鉱山での生活記録で、温かくて読み応えのある内容で、著者のお人柄が見事に表現されており、気に入っています。

著者は私の高等学校の恩師で、それも教師になって最初の生徒でしたので、特にいろいろとお世話になりました。

この度、自分のパソコンの中から探し出して、著者の許可を頂いて私のホームページ (http://book.geocities.jp/kunio_suwa/) に掲載させて頂きました。

なお、著者はお元気で最近米寿を迎えられたことを付記します。

内容に関連して

実際に生活されたのが昭和35年からの5年間(1960~65年)、書かれたのが昭和53年(1978年)ですから、2012年の時点からみて各々52年前と34年前とです。当時は、米坂線に蒸気機関車が走っていたことがわかります。その後、本文にあるとおり鉱山が閉山になっただけでなく、ダムの完成によって米坂線の線路が付け替えられ冒頭に登場する「玉川口駅」自体が消滅しています。

2005年の冬にこの米坂線に乗りに行き、雪で不通のため坂町から米沢へ向かう代替バスに乗りました。JR線に並行する国道は見事に除雪されて沿道は快調でした。ところが米沢盆地に入って国道から離れると町中の道路の除雪ができておらず、そこからが難行でバスの運転手さんの除雪を手伝いました。

この場所に関係する飯豊山山行に2009年に誘われましたが、体力と脚力から無理と判断して参加を止めざるを得なかったのが残念ですが、賢明だったでしょう。

注意したつもりですが、OCRの間違いが残っているかも知れません。あらかじめお詫びします。掲示直前に「重量」が「重畳」となっているのをみつけました。

諏訪邦夫

kunio.suwa@nifty.com

2012年6月28日